

#### 4 .小さな少年の夢( ティルレイ - ミンダナオ )

若いイムバンは、頑固な小さい少年でした。一度彼の頭の中にアイデアが浮かぶと、一旦思い込んだなら、何も誰も彼の心を変えることはできませんでした。

イムバンは、ほとんどの時間を川岸の近くにある木陰に座って過ごしていました。木のそばにあるこの川の中に、いくつかの竹で編んだ魚捕りの罟をしかけ、太陽が沈むまで、一日中これらの罟で捕まえようと思っていたのです。それらで何匹か魚を捕まえることを期待していたのですが、そんなことはめったにないことなのです。

若いイムバンは、釣竿と釣り糸に悩まされたくありませんでした。なぜなら、それらはたくさんの作業が必要ですし、彼の愛する空想の邪魔になるからです。

イムバンは貧しい農家の出身で、彼にはご馳走も、よい食べ物も、おもちゃも、買ってやることはありませんでした。そのため、イムバンは木のそばに座り、一日中毎日、夢を見ました。いつの日にか、金持ちになり、たくさんの土地、大きな家、よい服、おいしい食べ物、多くの召使、美しい妻、そして彼女は子どもを産んでくれる。

しかし、最も重要なことは、イムバンは馬を買いたかったのです。なぜなら、馬によって、彼はそれに乗って彼の広大な土地を一日中、そして毎日、自分がいかに金持ちであり、重要人物であるか、知りたいから、そして彼の前では、人々が、「いい日ですね。イムバン様。」と言ってくれるのです。

しかし、それは立派な馬でなければならず、少なくとも、手の18倍の高さで、アラビア馬で、栗毛の茶色、そして長い栗毛のたてがみで、長い栗毛の尻尾。

ある特別な空想の長い日のあと、イムバンは、魚の罟を調べ、彼が驚いたことには、彼は何ヶ月もして初めて、二匹の小さな魚を捕まえました。

イムバンは誇らしげに、葉に二匹の魚をくるみ、家へ帰る道を興奮して走って帰りました。フィリピンの神話と伝説 4 .小さな少年の夢

イムバンが家に着くと、誇らしげに葉を解いて、彼の罟で捕った二匹の魚を父に見せました。

彼の父は喜んで、「我々は夕食に魚が食べられるぞ。」と笑いました。

ところが、イムバンはすぐにまた魚を葉に包んで、父からさっと取り上げました。「嫌だ。」とイムバンは言いました。「これらの魚は、ぼくたちの食事のためじゃない。」

イムバンの父は、イムバンの態度に驚きました。「それじゃ、これでお前は何をやるんだ？」彼は問いました。

「明日、ぼくは市場でそれを売るんだ。」イムバンは答えました。彼は胸に魚をグイッと握りしめました。

彼の父は驚き、また空腹になりました。「明日、一匹を市場で売って、一匹を今夜一緒に食べたらどうだ。」

しかし、イムバンは頑固で、彼の頭を振りしました。「嫌だ。ぼくはどちらも市場で売るんだ。」彼はくり返し答えました。

彼の父はいささかイライラしました。「我々が今夜、どちらも空腹になってもか？」と老人が問いました。「それで、魚を売った金でどうするんだ？」

「貯めるんだ。」イムバンの答えが返ってきました。

「貯める？」困惑した父は、問いました。「何のために貯めるのか？」

イムバンの答えはすばやいものでした。「雌鳥を買うんだ。」

彼の父は笑って、イムバンの方に腕をかけて、「ああ、それじゃ、雌鳥が食べられるんだな。いい商売感覚があるな、息子よ。」

しかし、頑固なイムバンは、父の手を彼の肩から押しつけた。

「どうして、あなたはいつもすべて食べたいんですか。」彼は父に言った。

「なぜって、腹がへっているんだ！」明らかな答えが返って来た。

「ぼくたちは雌鳥を食べません。」とイムバン。

「ぼくはそれを使って、卵を産ませます。」

「しかし、息子よ。」父は笑っていった。「卵を産ませる雌鳥のために、雄鶏も必要だ。」

「それじゃ、雄鶏も買う。」とイムバンは答えた。

また父は笑った。「ああ、そうか。それなら、我々は卵を食べられる。」

イムバンは頭を振った。「いや、雌鳥に卵を孵させる。するとたくさんの市場で売れる鶏の赤ちゃんができる。」

イムバンの父は、イムバンの話に付いて行くのに苦労し、また、ヒヨコたちを売って受け取る金で何をするのか、ほとんど恐ろしくなった。しかし、そうするしかなかった。

「馬を買うつもりだ！」と、イムバンは宣言しました。それは世間ではまったく普通のことだったので。

彼の父は困惑しました。「しかし、わたしたちは馬を食べることはできない。」と彼は興奮して答えました。

「馬は食べるためじゃないよ！」イムバンは答えました。そして、父がバカに見えたけれど、父を見ました。「ぼくの土地を見て回るためにそれに乗るんだ。」

そして、イムバンは彼の魚を取って、夜、寝るために寝室へ行きました。

彼の息子が台所から出た時、父は失望して頭を振りました。そして独り言を言いました。「何という息子が生まれたことか。『食べ物を食べるためより、馬に乗りたい。』と言いやがった。」

その夜、イムバンは寝室の外の窓に、大切に魚を吊りました。そして気持ちよくベッドに横になり、目を閉じました。彼はすぐに、市場で二匹の魚を売っている夢を見ました。雄鶏と雌鳥を買い、雌鳥は何ダースもの卵を産み、ヒヨコに孵し、市場でヒヨコを売って、彼のアラビヤ馬を買う。栗毛の馬は、長いたてがみと長い尻尾。それは美しい夢でした。

次の日、いつものより早く、イムバンはベッドから飛び起きて、すぐに二匹の魚を手取るために窓に走り寄りました。

フィリピンの神話と伝説 4 . 小さな少年の夢

しかし、イムバンが、ヒヤッとしたことには、二匹の魚はいなくなっていたのです。使い物にならない白い骨だけが残っていました。夜の間に猫か他の動物が、たいらげて行ったのです。イムバンはショックを受けました。彼の夢は、始まる前に終わってしまいました。

悲しむイムバンが台所へ足を引きずって行った時、彼の父は農作業に出る用意をしているところでした。

「おはよう、イムバン。」と父は言いました。「どうして悲しい顔をしているんだ、息子よ。今朝は市場でお前の魚を売ることが、不安になっているんだらう。」

イムバンが父に、夜の内に猫に魚を食べられたことを告げると、父は若い息子に手を置いて、言いました。「息子よ、夢を持つことは、間違っていない。しかし、夢を現実の道に直結させてはならない。もし、夢が大き過ぎると、それは、現実にはならない。それは、手に届く小さなものにしておかなければ。ほら、お前の大きな夢とお前の頑固さのため、食べる魚もないし、市場で売れる魚も、お前は持っていない。」

イムバンは父を見ました。「でも、もっと今朝は魚が罾に捕れているかもしれない。」彼は興奮して言いました。「今回ぼくは、父よあなたの忠告に従う約束をします。もし、二匹捕ったら、一匹だけ明日、市場で売り、一匹は今夜の夕食に食べます。」

彼の父は、息子に微笑み、彼がついに完成を持って、物事を見はじめたことを喜びました。

イムバンは家から出て、飛んで川へ行き、そして、夜のうちに何か罾に魚が捕れているか、確かめに行きました。

彼は木の所に辿り着き、水の法へ膝をついて降りて、魚の罾を興奮して見ました。しかし、魚捕りの罾は、流れていました。夜のうちに、強い川の流れるによって、押し流されたのでした。

がっかりしたイムバンは、悲しい顔をして木の陰に座りました。そして手を頭に付けました。

彼の父は全く正しかったのです。彼の夢は大き

すぎました。今、イムバンは魚と魚の罟を失いました。すべては、存在していない馬のために起こったことでした。